



TITLE:

<學界展望> 渤海史研究の回顧

AUTHOR(S):

外山, 軍治

---

CITATION:

外山, 軍治. <學界展望> 渤海史研究の回顧. 東洋史研究 1936, 1(5): 485-492

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138698>

RIGHT:

## 渤海史研究の回顧

外 山 軍 治

渤海史の研究には一沫の寂しさがつきまといふ。それは渤海國自らが記録を残してゐないので、僅かに我が國や支那に傳へられた數少い文獻に據らなければならず、自然その結果として、論議すべき問題の範圍が躡踏せられることである。然しながら、關係史料の半ばが我が國に在るといふことが幸ひして、我が國人の研究が斷然優越を占めてゐる滿洲史の部門の中でも、殊更に我が國人によつて早くより開拓せられ、その論作も甚だ多い。

我が國に於ける渤海史研究の起りが、日露戦争後我が學界の注意が滿洲に向けられた結果であることは、滿洲の部門の場合と同様である。先づ内藤湖南先生は、明治四十年夏、大阪朝日新聞社叡山講演會で『日本滿洲交通

略説』(同年十一月發行叡山講演集及び今年四月發行湖南先生著東洋文化史研究)と題して講演せられ、その中に於て、日本と渤海との平和な國交を述べ、併せて渤海の歴史、地理を略説せられた。爾來三十年を経た今日、訂正せらるべき點も生じてはゐるが、兎に角早期に於ける啓蒙的な卓説として注目すべきものである。これと略々同様の考説は、大正四年稻葉岩吉氏が『滿洲發達史』を發刊するに當り、これが序文として卷頭に載せられてゐる。稻葉氏のこの論著も亦渤海に説き及んで所論見るべきものがある。

これと相前後して東京に於ては、滿洲の歴史・地理の研究が盛んとなり、その結果として、渤海の疆域地理を論じたものに松井等氏『渤海國の疆域』(大正二年。滿洲歴史地理第一卷)

渤海の建國の事情と地理とを敍べた津田左右吉氏『渤海考』(大正四年。滿鮮地理(歴史研究報告第一)、渤海の始祖に就て論述した池内宏氏『渤海の建國者について』(大正三年。東洋學報第五卷土著滿鮮史研(究中世第一冊)の諸論文が發表せられた。更に池内氏には、

専ら唐代より遼代にかけて渤海の邊境に在つて獨自の存在を示してゐた鐵利族の住地とその活動を述べたものながら、主題に關する限りに於いて、渤海の地理、社會狀態、滅亡後の遺民の處置、我が國との修交等に關しても論及した『鐵利考』(大正六年。滿鮮地理(歴史研究報告第三。滿鮮史研究中世第一冊)がある。

又大正四年には、今は京城帝大教授である鳥山喜一氏の若き日の力作『渤海史考』が上梓せられた。これは氏の卒業論文を補訂したもので、渤海王國の興亡を中心としてその民族の消長を敍べ、その文化を論じ、我が國との國際關係を詳述し、都府及び四至に就ての考證を載せ、その後二十年、渤海史に關する唯一無二の良著として學界に重視せられて今日に及んだ。勿論今日より見れば、是正すべき個處も尠くはなく、氏自身も「インキの塗沫、書き入れによごれきつて綴りも綻びた舊著の上、徒らに煩枝をつく日も少くないことを悲んでゐる」(昭和八年。青丘學叢第十四號簽載。渤海國)と述懐してゐられるが、二

十幾年の昔に於てこれ程に纏め上げた功績は忘れることが出来ぬ。私はこの間著者の怠らざる努力によつて加筆補正せられたこの論著が、新しい姿を以て再び我々の机上を飾る日を待望するものである。

この頃より後十數年間、殆んど論作の發表せられたのを聞かなかつた渤海史の研究に、再び春の回り來つたのは、言ふまでもなく滿洲國成立後のことである。我が學界は再び滿洲史に對する關心を深くし、我々は滿洲に於ける古き獨立國たる渤海の遺蹟を踏査發掘する好機にさへ惠まれた。昭和八、九兩年に互る東大助教原田淑人氏を主班とする東亞考古學會の上京遺蹟の踏査がそれであり、千二百年間地下に埋もれた渤海王國の文化は明かにせられ、遺蹟・遺物の上から渤海史の解釋に一大光明を與へた。これ實に鳥山氏の言はれる如く昭代の盛事である。この調査の詳細なる結果は、近き將來に於て東亞考古學會より發表せられる調査報告によつて知られるであらうが、その一斑を傳へたものに、鳥山氏『渤海國々都址の發掘に就いて』(昭和十年。京城帝大滿蒙文化研究會報告第三冊。北滿の二大古都址東京城と白城)原田淑人氏『滿蒙の文化』(昭和十年。岩波講座東洋思潮)世界文化史大系七隋唐の盛世(昭和九年。三上武男氏執筆)世界歴史大系

東洋中世史二(昭和九年。同氏執筆滿洲に於ける唐代文化の波及と渤海國)がある。又この古き王國と我が國との平和なる國交が新たなる感情を以て回顧せられるに至り、沼田頼輔博士の『日滿の古代國交』(昭和八年)の刊行をみた。これは實に「日滿兩國の間に於ける親仁なる古代の國交を知らしめて、これを兩國民の教化に應用せんとする」ことを目的として書かれたものである。

さて一方、白鳥庫吉博士は、近來渤海史の闡明に力を注ぎ、昭和八年十月には『渤海國に就て』(渤海國上京發掘物展覽會の十四編第十二號彙報參照)、昨十年五月には『渤海史上の難問題に就て』(東洋文庫春季東洋學講座講演。史學雜誌第四十六編第九號)、十月には『滿洲の地理を論じて渤海の五京に及ぶ』(史學會例會講演。史學雜誌第四十六編第十二號)と題して、從來問題となつてゐた渤海の始祖の出自、渤海國を組織した民族に就て論定し、疆域地理を考へ、五京の中で未だ定説のない東京・南京の位置を考定した。これ全く、渤海史の再檢討ともいふべき態度であり、博士の高き識見によつて從來の難問は次第に解決の曙光を認めた。その他再檢討の態度を以て發表せられたものに、鳥山氏の近業「渤海國官制補説」(本年五月。服部先生古稀祝賀記念論文集收)がある。

他方滿洲に於ては、前國立圖書館副館長金毓紱氏があり、渤海史の研究には深き興味を懷き、鳥山氏の『渤海史考』を漢譯させて熟讀したといふ。數年に互る研鑽の結果、一昨秋勞作『渤海國志長編』を公にしたが、これは渤海に關する史料集として重視せられるばかりでなく、その論說には從前の考説を訂正した所も亦尠なく、好著の名に背かない。その外支那人の著としては、初め金氏を喜ばした唐晏の『渤海國志』(民國八年)、民國二十年物故した黃維翰の遺著『渤海國記』(遼海叢書第一編に收めらる)があり、これらは何れも史料集である。又朝鮮には丁鏞の『大韓疆域考』(李太王光武七年刊)があつて渤海の地理を論じて詳かである。以上大體渤海史に關する論著を紹介した。次に、渤海史の研究に於ては從來如何なる問題が如何に論議せられ、現今に於ては如何に落着してゐるかに就いて、いはゞ從前の研究の整理といふ意味で略説しよう。

先づ渤海の開國者は何人であるか、渤海國を組織したのは如何なる民族であるかに就いては早くより議論が重ねられた。唐の則天武后の萬歲通天元年(六九六年)、營州(今滿洲國朝陽)に於ける契丹人李盡忠の叛亂を好機として、當時こゝに移住を強ひられてゐた渤海の始祖は、靺鞨の部衆

と共に東滿洲の地に遁れて國を建てたのであるが、議論の起りはこの経過を敍べた新舊兩唐書の記載が一致を缺き舊唐書渤海傳は渤海の始祖を『大祚榮』とするに反して新唐書渤海傳は祚榮の父『舍利乞乞仲象』なる人を開國の祖としてゐることに在る。池内氏は、仲象と祚榮とは

同一人で、仲象は建國前營州在住中の本名であり、祚榮は建國後更め用ゐた支那風の名であると斷じ（渤海の建國者について）、津田氏之に従つた（渤海考）。鳥山氏は池内氏説を *logical* の嫌なきにあらずとして従はず、始祖大祚榮は仲象の死後靺鞨軍を統率した他の首領であらうとの推測を下し（渤海史考）、白鳥博士も亦この兩人を同一人と見ないで乞乞仲象は靺鞨人であらうといつた（講演。渤海國に就て）。

又建國者の出自、渤海國を組織した民族に關しても兩唐書は記載を異にし、舊唐書靺鞨傳には「渤海靺鞨の大祚榮なる者は本と高麗の別種なり」とあり、新唐書渤海傳は「渤海は本と粟末靺鞨にして高麗に附きし者、姓は大氏」と記す。津田氏は建國當時の地理的關係より祚榮は靺鞨の一部族たる白山部の人であらうと考へ（渤海考）、鳥山氏は、この兩書の記事を融和して、主權者たる大祚榮は高麗の別種であり、渤海王國を組織せる主力は靺鞨族

であらうと推測し（渤海史考）、池内氏は治者階級に立つ渤海人は所謂「粟末靺鞨」であり、亦靺鞨人に外ならぬとしてゐる（鐵利考）。白鳥博士は渤海王と我が朝廷との間に往復した文書や、我が類聚國史の記事を據り所とし、又我が國に來朝した使者の多くが高句麗の王室名若くは漢名を有し、滿洲名を有する者が極めて少いこと等を擧げて、大祚榮は舊唐書にいふ通り高句麗人で、王朝並びに上流社會を組織した者は高句麗人であり、被治者は靺鞨族である。高句麗の遺民は靺鞨族を利用し、これと結んでその國の興復を計つて成功したものであると述べてゐる（講演。渤海國に就て）。

更に之に關して異色ある考説を提示したのは稻葉氏である。氏は靺鞨を種族名と認めず、之に相當する語を梵語 (Mata 大の意) に求めて之を大人の意と解し、「姓は大氏」の大氏はその譯字であると見た。されば種人の名稱としては肅慎より直ちに女眞(女直)となる譯で、女眞の名稱は契丹以後のものでなく、渤海の始祖乞乞仲象の乞乞が即ち女直の初音であると考へた。即ち仲象・祚榮は女真人の巨酋であり、この巨酋が中心となつて渤海國を建設したのであるが、しかしこれは女真人のみの力

でなく、高句麗遺民の合流によつてなされたものであることは、舍利乞乞仲象の舍利が女眞語の泉の意であり、高句麗の大姓泉氏(泉蓋蘇文の家)と關係づけられるといふことに於ても考へ得られる。渤海の主權者及び司配階級は、松花里龍兩江の女直人であつたらしいが、その文化は幾んど高麗人によつて占められてゐたものと考へられるといつてゐる(今年二月。青丘學叢第二十三號。金載。)。實に犀利驚くべきものがある。

かくて東滿洲の地に建設せられた渤海國の歴世が從來十四代といはれてゐたのを、唐會要卷五唐昭宗乾寧二年十月の記事に『渤海王大瑋瑑』なる者のあるを發見し、これを玄錫王と末王諱譔との間に加へて十五代となすべきことを論じたのは、金氏(渤海國志長編)の功績として特筆すべきものである。

この王國の極盛期に設置せられたといふ五京十五府の設置の由來、その時期その位置を論じ王國の領域を考へたものは甚だ多く、議論百出の有様である。先づ五京設置の思想的由來を考へて鳥山氏は、陽には唐の四都の制に刺戟せられ、陰には五行思想と唐への對抗的精神とに作用せられ、唐の四京であるのに一京を加へて五京とし

たとへし(渤海史考)、白鳥博士は、高句麗本來の五部の制に基いたもので、たゞ上京を北に置いたのは支那の影響であると見た(講演。渤海國に就て)。又五京十五府設置の時代に就ても、津田氏は第十代宣王仁秀の時、唐にあつては元和・寶曆の頃であらうといひ(渤海考)、鳥山氏は、早くも第六代康王の頃であり、新唐書が之を宣王の治世に記してゐるのは、當らずと雖も遠からざるものであると考へた(渤海史考)。白鳥博士は、五京の出來た年代は、諸種の事情から考へても七六二—七六六年の間(渤海では第三代文王の治世)と見られるといつてゐるが(講演。渤海史上の難問題に就て)、この講演筆記では理由を明にしてゐないので當否は論ぜられぬ。

五京の位置に就ては殊に異論が多い。今の濱江省寧安縣東京城に存する遺蹟が渤海の上京龍泉府のそれであることは今日では周知の事實であるが、清朝の學者には之を金の上京址と考へるものが多かつた。我が國ではこの説を採るものはなかつたが、この地を渤海上京址と認める一方、金の遺蹟でもあると考へる人はゐた。それは東京城といふ現在の地名の由來を考へた松井氏の假説である。松井氏は金史卷二四地理志に、遼天顯十三年以來東京と稱せられて來た遼陽府(今の遼陽)を、「太宗天會十年、

南京路と改む」とあり、爾來二十一年後の海陵王貞元元年に至つて金の國都が燕京(今の北平)に遷された際、再び東京と呼ばれるに至つたものである。この二十一年間東京と呼ぶべき地を設けなかつたか否かは史に明文がないが、今日の東京城はこの二十一年間東京として立てられてゐた地であらうといふ推測を下し、東京城内より天會云々と刻した國學碑を發見したといふ寧古塔紀略の記事を引き、天會年間にはこの地は繁華な都會であり、一時金の東京となつてゐたことを推察するに足るとなし、東京城なる名稱は恐らく金代に起つたものであらうと考へた(明治四十三年。歷史地理第十五卷第一號、金の東京城考。滿洲歷史地理第一卷、許亢宗の行程錄に見ゆる遼金時代の滿洲交)。然しこの實に着想の奇抜な推定も、その後に至り、この説の出發點となる金史地理志の記事を誤讀してゐることが箭内互氏によつて指摘せられて成立の根據を失つてしまつた。即ち箭内氏は、「天會十年東京を南京路と改む」と讀むのは誤りで、今少し下まで續けて「天會十年に南京路平州軍帥司を改めて東南路都統司と爲せる時云々」と讀むべきで天會十年東京遼陽府が南京と改められたことにはならぬと説いた(大正五年。滿鮮地理歷史に關する研究。蒙古)。この説は正しい。かうなると松井氏

説は立つ瀬がなくなる。又上京遺蹟の發掘品が純一で他の時代のものを含まぬといふ事實も松井氏説を愈々不利な立場に置いた。さすれば東京城といふ現在の地名の由來は今の處未解決のまゝに残されてゐる譯である。

中京顯德府の位置に就ては主なる説が三つあり、一は吉林省華甸縣の蘇密城説で、小川琢治博士が提唱し(明治四十二年。京大史學研究會講演集第二、長白山附近)、地勢及び松花江水源、同博士著支那歷史地理研究、鳥山(渤海考)、金(渤海國志長編)氏之に従つた。二は輝發江流域の那丹佛勒城説で松井氏の説(渤海國の疆域)、三は吉林省敦化附近に比定せんとする説で津田氏之を唱へ(渤海考)、池内氏之に従つた(鐵利考)。以上三說中敦化説最も優勢で白鳥博士も之を定説と見做してゐる(講演。滿洲の地理を論。じて渤海の五京に及ぶ)。

東京龍原府に關しては、大韓疆域考の成鏡北道鍾城説、那珂博士の浦鹽斯德説(明治三十九年。地學雜誌二〇五號。古の滿洲)、内藤博士のニコリスク説(滿洲發達史序文)があり、松井(渤海國の疆域)、鳥山(渤海史考)兩氏の間島省琿春説、池内氏(鐵利考)の局子街説がある。白鳥博士は昨秋の講演で琿春説を強調してゐるが、従前の諸家が根據とした東京は上京の東南に當り、東南海に瀕し日本道なりとの新唐書傳(渤海)の記事の外に、龍原府の又の名柵城府に留意し、三國時代北沃沮が買溝

婁と呼ばれたこと、これが mo-i-khor の音譯で木ノ城の意であることを論じ、この買溝婁の本地に關する三國志魏書沮傳の記載を今回の旅行の實見に徴せばこれは琿春河と合した豆滿江流域を指したものでなければならぬと論定し、この地方が後に柵城(木ノ城)と呼ばれたものに違ひない、依つて東京は琿春に比定すべきであると斷定した(講演。滿洲の地理を論じて渤海の五京に及ぶ)のは注目すべきである。

南京南海府に就ては、湖南先生は咸鏡北道鍾城府の一古城址で南京と呼ばれる地がそれであらうと推定し(日本滿洲交)、松井氏は咸鏡北道鏡城に當て(渤海國)、鳥山氏は初めは之に贅し(渤海)(史考)後には咸鏡南道北青郡内に比定した(北滿大古都址、東)(の二京城と白城)。大韓疆域考は同道咸興説を出し、池内氏も亦咸興説を唱へた(大正十一年。滿鮮地理歴史研究報告第一〇金末の滿洲中世第一冊)白鳥博士は新唐書(渤海)に南海府下の屬州の第一に擧げられた沃州は南海府治の所在地であらうと考へ、この沃州は古の沃沮城の故地を襲つたものであり、古の沃沮即ち漢の沃沮縣治が今の咸興に當る事は疑なし、更に沃州の產物として記されてゐる縣は絹であり、生糸は咸鏡南道からは出るが北道はその南部を除く外は養蠶に適しないといふことを重視して咸鏡説に贅し、從來鏡

城説の根據をなしてゐた「南海は昆布を産す」といふ新唐書(渤海)傳の記事は、南海府を指すのではなく東南の海の意であると軽く片付けてゐる(講演。滿洲の地理を論じて渤海の五京に及ぶ)。

西京鴨渚府には松井氏の安東省臨江(帽兒山)説(渤海國の疆)鳥山氏の同省洞溝説(渤海)(史考)があるが、臨江説を採る人が多い。諸府の位置に就ては、松井(渤海國)、津田(渤海)、池内(鐵利)諸氏の所説紛々として從適する所を知らぬ。

たゞ松井氏が率賓府をニコリスクに、扶餘府を吉林省農安附近に當てたのは定説と認められて來た様であるが、扶餘府に關しては最近金氏によつて奉天省北境四面城説が出された(服部先生古稀祝賀記念論文集)。都府に關する考説はこの外枚舉に遑がない。然しこれは今後行はるべき實地踏査の結果と相俟つて始めて正鵠を期する事が出來よう。なほ渤海の四至に就ては、松井(渤海國)、津田(渤海)(考)兩氏によつて略々考へ定められてゐる。その中西境に關しては島田好氏の異説があり、渤海の西境は遼東に迄及ばなかつたといふ從來の説に對し、續日本紀に天平寶字二・三年に木底州(稻葉氏は今の興京縣本奇に、津田氏は太子河の上流に比定)・玄菟州(奉天附近)刺史の來朝を記してゐるのを重視して、今の奉天附近が渤海の版圖に入つた以上、遼陽が渤海の領土に入らな



つたとは思はれないと論定した(昭和九年滿洲學報第三。唐末の滿洲)。

津田氏もこの記事に注意して、この當時これらの地方が渤海の領域内に入つてゐたことは認めてゐるが、これは一時的のことで、その後渤海はこれらの地方を失つたものであると考へてゐる。要は續日本紀の記事を一時的とみるかみないか、説の岐れる所である。白鳥博士(講演。渤海史上の難問題に就て)も亦津田氏と同様に、之を一時的のことと考へ、渤海は他國と陸地を接するを嫌つて接壤地域をすてたことが多いから、これも又その一例であらうとみてゐる。

渤海と我が國との交渉に就ては、鳥山氏の『渤海史考』に詳細なる説述が見られる。沼田博士の『日滿の古代國交』は兩國間の往復文書の解讀によつて修交を敘べたものの、粗笨のそしりは免れぬが、渤海史考が三十三次の來朝を傳へてゐるのに二例を追加して三十五次と爲したのは手柄である。金氏の長編も亦三十五次説を出してゐる。

その他渤海國興亡の過程、唐との交渉、黒水靺鞨との關係、文化の特質、官制制度等に關しては『渤海史考』に一通り詳述せられてゐる。たゞ渤海の社會經濟に關しては、僅かに我が類聚國史、新唐書<sup>渤海傳</sup>、宋の王曾の紀行文、洪皓の松漠紀聞等に見える零細な記事を拾つてそ

の片鱗を窺ふに過ぎず、諸家の記述亦この範圍を出ないのは蓋し致し方のないことであり、一度び渤海の歴史を繙いた者は何人と雖もこの困難を痛感するのである。

以上概略諸家によつて論議せられた諸問題に關する研究の成果を述べた。近年に於ける白鳥博士の活躍は目覺ましいものがあり、該博なる言語學上の知識もさることながら、廣く眼光を上下の時代に配り、一見陳腐とさへ思はれる史料を熟考安排して論歩を進めてゐる點は、史料の局限されたかゝる方面の問題を取扱ふ者の深く鑑とすべきことであると考へる。さて渤海史研究の跡を顧みて感ずることは、渤海王國自體に就ては史料の存する限りに於て論ぜらるべきことは一應論ぜられてゐて、滿洲史の他の部門に比して著しく開拓せられてゐるといふことである。更に今後に於て望ましいのは、渤海國故地の要處に於ける考古學上の實地踏査であり、この結果と相俟つて研究は一層高次のものとなり、この王國の全貌は闡明の一步を進めるであらう。かくしてこそ渤海史研究につきまとい一抹の寂しさも幾分解消するといふものである。